



新刊書ご案内

西山俊彦 著

私的所有権の不条理性と構造的暴力

2011年6月29日発行

サンパウロ A5判 572頁 価格 5800円+税

「私的所有権」の根拠は何か？

この人類にとっての根源的な問いにキリスト者であり哲学、神学、社会学、教育学を専らとする学究として、不思議のみ手のままに直言する

「わたしは神」「あなたたちは皆兄弟」、
この信仰の原点に立ち帰らなければ、キリスト教はキリスト教でなくなる。

と同時に、この同じ原点に立てなければ
真理も正義も、科学も学問も、そして
それらすべての実りである平和も成り立たず、
本来の目標達成も覚束ない。

この書は、上記課題を、各分野の専門家にも通用するかたちで、詳述した。

(著者の言葉)

(帯の言葉案文より)

権利あつての秩序、私的所有権あつての人間活動、しかし、最も根源的で神聖視されている所有権とそれによる既成秩序を正当化できるいかなる権原があるのか、この核心を回避不問に付して、人間活動の理性的自覚化を自称する学問科学では、真理とも正義とも全く無縁で既得権の擁護と体制追従に終始しているにすぎないのではないのか。科学的営為はいうに及ばず、人類秩序の再構築を志向する平和の実現には、不条理な原理原点を無自覚なままに放置することは許されることではない。この原点の覚醒なくして人間社会に秩序なし、正義なし、平和なし、勿論科学なし

「いったいあなたの持っているもので、いただかなかったものがあるのでしょうか。

もしいただいたのなら、なぜいただかなかったような顔をして高ぶるのですか。」(聖書)

キリスト者でもあつてもなくても、宗教者であれば、生命も持ち物も「すべては神の恵み」とか「預かりもの」と公言し、科学者であれば「人間みな平等」「権利は生来、普遍的」を前提としながら、その実際は、富者と貧者の天地の差を、あるいは無自覚なままに放置し、あるいは疑問に思っても諦めて平然、しかし、原点に戻り、真実に目覚めることこそ、神の子への一歩ではないのでしょうか。

西山俊彦

1935年酒田市に生まれる 1953年明星高等学校卒業 1955年上智大学3年中退 1955-62年ローマへ 1962-65年アメリカへ留学

1961年司祭叙階 1965~87年英知大学教員。

哲学修士(Ph.L)ウルバノ大学 1958 神学修士(S.T.L)ウルバノ大学 1962 社会学博士(Ph.D)セントルイス大学 1965 教育学博士 京都大学 1983

1985年-1986年サバティカルを得て、第一回世界平和巡礼。 国際機関、各種平和研究所、難民センターを訪れ、「平和の福音」

に悖る世界情勢とそれへの対応の不在に驚愕、教職を退き、「国連開発旬年」を中心に平和研究と運動に専心。

内 容 紹 介

推薦のことば
はじめに

第Ⅰ部 私的所有権の不条理性

—第Ⅰ部への招き—

1. トマス・アキナスに基づく私的所有権の再解釈と若干の帰結 —抄録—
2. 社会資源の配分・帰属の偶有性とその帰結 —普遍的秩序（平和）構築への前提条件の共有化のために—
3. 私的所有権の個別的論証の非論理性 —「自己所有権」の問題点を中心に—
4. 私的所有権の偶有性と経済（社会）学の課題 —抄録—
5. 私的所有権の人間本性性とその帰結 —抄録—
6. 私的所有権の不条理性 —平和学は体制変革の学であるとの共通認識への一助として—
7. WHAT WOULD YOU DO, IF THE GROUND YOU ARE STANDING ON SUBSIDED ALTOGETHER ?
8. いかなる「機会の平等」いかなる「結果の平等」が論理整合的平等概念なのか？

第Ⅱ部 構造的暴力の背理

—第Ⅱ部への招き—

1. J.ガルトゥングによる「構造的暴力」概念の整序化と平和への課題
2. 構造的暴力と平和構築の課題 —積極的平和と消極的平和の差異を踏まえて—
3. 「構造的暴力理論」は「完全平等主義」と「絶対人格主義」との別名ではなかろうか？
—「個人レベルの所与」からの解放をも「ポジティブな所与」からの解放をも不可欠としていることに 関連して—
4. 「構造的暴力理論」の批判的考察と平和学の課題
（補論）構造的暴力の概念について —ヨハン・ガルトゥングの西山論文へのコメント—

第Ⅲ部 平和学と平和構築への諸ステップ

—第Ⅲ、Ⅳ部への招き—

1. 平和学の創造 —抄訳—
2. 理念としての平和 —平和学パラダイムの事例的検討—
3. 科学的社会（科）学と普遍的秩序定立課題 —グローバル階級構造の一事例分析より—
4. IDSⅢ、第三次国際開発戦略 —その中間評価とその基本的課題(1)—
5. IDSⅢ、第三次国際開発戦略 —その中間評価とその基本的課題(2)—
6. DDⅢ（第三次国際開発旬年）と社会科学の課題
7. DDⅣ（第四次国際開発旬年）への認識論的前提条件
—現行秩序が偶有的規定でしかない事実立脚する必要性に関連して—
8. 「ミレニアム開発計画 Millennium Development Project」の概略

第Ⅳ部 根元的課題への原理的アプローチ

1. 経済行為の成立根拠が「不完全競争」要因の独占に起因することの帰結
—「社会的効率と平等」、そして「持続可能な開発」の実現可能性に関連して—
2. 持続可能な開発原理の二律背反性と普遍的秩序（平和）構築原理としての不可欠性
3. 科学的社会学定立への基本要件 —現代「社会の危機」と「社会学の危機」超克への一提起—
4. 附「事実規定論」の寸描

第Ⅴ部 「こころ」こそ平和のいのち —信仰と平和—

1. “問われている” —信仰の正体が—
2. 「平和」それは信仰の本質
3. 平和 —それは交わりの果実—
4. 「平和」現代の不安とその充足の視点から
5. 無言の宣教師 —貧しく生まれ、貧しく生きた J・ジュピア神父
6. 5セントのさわやかさ

おわりに
初出一覧
心から心へ